注記：本論考は日本国際問題研究所領土・主権・歴史センター東アジア史研究会委員の見解であり、日本国際問題研究所の見解を代表するものではありません。

習近平「新時代」の歴史認識
―中国社会科学院院長高翔の歴史学・歴史教育論―

川島真
（東京大学）

中国の歴史認識は大きく転換しつつある。習近平政権が「国家から党へ」と権力を移動させることに連動して、歴史についても、一定程度の「愛国」重視の傾向を残しながらも、「国家史から党史へ」とその重点を移している。これに伴って、中華民国史などはしばしば歴史虚無主義として強く批判されることになった。また、2015 年の抗日戦争勝利 70 周年までの時期と大きく異なり、2016 年以降は台湾との間の統一戦線的な歴史認識が事実上放棄されつつある。具体的には、日中戦争において国民党と協力して勝利したという統一戦線的な歴史認識が大きく後退したのである。これらのことは教育にも反映され、特に 2021 年の中国共産党成立 100 年前後以降、四史（あるいは愛国主義教育法に基づく五史）を中心とする学校（政治）教育、社会教育が実施に移されてきている。

この習近平政権の歴史政策を見るうえで、報告者が以前取り上げた「馬工程」などのプロジェクトも重要となるが、研究者の中で習近平政権の歴史政策を支えた一人が、社会科学院院長になった高翔であった。この報告では、高の履歴などを紹介した上で、中国社会科学院の歴史関連の組織が中国歴史研究院へと統合されていく過程、そこで高が副院長、院長へと昇進し、さらに社会科学院副院長になっていく過程を述べた上で、主に高が社会科学院副院長であった時期の、歴史および歴史教育をめぐる言論を取り上げて考察した。その言論の主たる内容、またそこで強調されていたことは以下の数点であった。

第一に、高の言論は強く「歴史虚無主義」を批判するものであった。第二に、習近平が中国歴史研究院成立時に寄せた祝辞を踏まえて、中国歴史研究院が全国の歴史研究者を凝集させていく拠点となるということ。第三に、高が専門とする清代の歴史については、清代を中国の国家統一期とみなすことまた国家清史編纂委員会とも協力するとしていること。第四に中国近代史の主旋律について中華民族が半封建半植民という事態を克服するために最終的にマルクス主義を選んだことに置くこと。また、近代史を把握する際には決して西側の「現代化論」には拠らないこと。

中国の歴史は大きく「党史」に傾斜し、その近現代史も書き換えられつつある。日本との歴史をめぐる問題なども中国で再構築される可能性も否定できない。